

## IV. キャリア再考への序章

### 学びの森の住人たち (19)

—学校でもない学習塾でもない、  
〈学びの森〉という世界が投げかけるもの—

アウラ学びの森 北村真也



#### 2. 認知的個性

##### —Cognitive Individuality

〈認知的個性〉 *Cognitive Individuality* というコトバがあります。これは、個人の認知というものは、もともと多様であるし、また、さまざまな環境との関係性において個人の認知は変化し、ますますその多様性を構成していくという考え方です。さらにここでは、個人の発達そのものも個性であると考え、定型的な発達概念の意義さえそこに疑問を投げかけるのです。また、この〈認知的個性〉という考え方をベースにおいた個性化教育や才能教育、あるいは発達障害を抱える子どもたちへの支援教育などの教育的実践も展開されていきます。

これらの実践は、モノログで単層的な学校教育の中にあって、より多様な実情に対応すべき試みとして注目されますが、あくまでそれは補助的な実践であり、決して学校における教育活動の主流とはなり得ないように思います。学校はあくまで近代モデルとして機能していくからです。それに対して、私たちは不登校の子どもたちを、学びの森という多層的な構造を持つ環境で迎えます。そこは森ですから、もともと雑多なものが共存する世界なのです。雑多であるからこそ、そこは新しい価値を生み、

新しい命を育んでいくのです。

不登校という状況の中で苦しみ傷ついた子どもたちは、アウラの森の環境に、あるいは教師や仲間たちによって、癒されていきます。森は多層的な世界であるだけに、一つの層で癒されなくても、どこかの層で癒されることが可能なのです。またアウラの森における学びの世界は、教師主体ではなく学習者主体の世界です。みんなが同じカリキュラムを一斉に学ぶのではなく、一人一人が個別のカリキュラムを、個別のペースで学ぶのです。アウラの森では、環境、そして教師や仲間たち、さらには学習方法までもがこの認知的個性を満たす状況を提供しているのです。

やがて、その傷を癒された子どもたちは、自分の学びの活動を足掛かりとしながら、自信を獲得し始めます。ここでは自律的な学びであることが、より大きな自信となって子どもたちへ回帰していくことにつながります。アッコにしても、サトルにしても、ヒロシにしても、彼らが自分自身の過去を再構築していく足掛かりは、学びの世界にあったのです。毎日毎日、地道に積み重ねられる彼らの学びの世界が、やがてしっかりとした足場となるのです。それは啓発的なワークショップ形式の学びの取り組みと

は大きく一線を介します。地道な日々の積み重ねは、コトバを超えた世界を作り出すからです。サトルやヒロシは、自分で学び終えたプリントが1メートルもの高さになるまでに、果たしてどれほど自分自身と向きあってきたのでしょうか？ここにこそ、彼らの強さが育つわけです。それは、溢れる情報のもとで、コトバの世界に翻弄されていく若者たちの認知のパターンとは大きく異なる点かもしれません。

自律的な学びは、子どもたちの個別の理解度に応じて組み立てられます。多くの場合、不登校の子どもたちの学力は、大変不安定な状況にあります。中学3年だったサトルは中1から、中学2年だったヒロシは、小3の内容からの学び直しをおこないました。このように、多様な理解状況を持つ子どもたちを前にした時、自律的な学びと個別のカリキュラムはセットで成立します。

個別のカリキュラムが、なかなか今の学校で成立しないのは、「管理」の問題がそこにあるからだと思います。「個別化の名のもとにみんながバラバラのことをやり始めたら、收拾がつかなくなる」という不安があるのです。一方、アウラの森では、複数の学年の子どもたちが、複数の教科を同時に学びます。しかも、クラシック音楽が流れるたいへん静かな環境の中で学習が営まれます。このような多様な状況が、混乱をせずに成立するのは、彼らが自律的な学びを展開しているからだといえます。子どもたちは、常に自分の課題に向き合うのです。具体的に学んでいる対象は違いますが、自律的な学びを展開しているという点では、

同じことを行っているわけです。そしてさらに、そんな彼らを森という環境が包み込んでいるのです。私はここに、認知的個性を尊重する学びの世界を成立させる構造があるように思います。

不登校の子どもたちの多様性を、認知的個性という概念で捉えなおした時、その学びの場は、自ずと一斉型の学校とは異なったものとなっていきます。冒頭で紹介したように、それは個性化教育、才能教育、あるいは支援教育といった枠組みで様々な実践が報告されているのですが、私たちは、それを「学びの森」という枠組み全体で受け止めようとしてきました。子どもたちの多様性を受容するためには、方法論やカリキュラムだけでは不十分だと考えたからです。そこには、大きな木や、クラシック音楽、水槽に泳ぐ熱帯魚などの物理的な環境要素と教師や仲間といった人的な環境要素からなる複合的な〈環境世界〉というというファンクションが必ず必要となっていくことを予見していたのです。具体的な学びの方法論や構造を、森という環境世界の中に落とし込み、その整合性を構築していったときにこそ、そこに多層的な厚みを持った場が広がることを私たちは証明してきたのです。

